

# 訪問看護



# ステーション便り

問 訪問看護ステーション  
☎ 32 - 2416

## 人生の最期の時を、どこで、誰と、どのように過ごしたいですか

1970年代以降「病院で最期を迎える」というスタイルが定着しました。しかし、最近では個人の想いを尊重して、住み慣れた自宅や希望する場所での看取りが少しずつ増えてきました。訪問看護では「人生の最期の時を、どこで、誰と、どのように過ごしたいか」という希望に寄り添い支援しています。

市訪問看護ステーションでは年間約40人の方が亡くなり、約半数の方がご自宅で看取りをされています。今月は、看取りまでの訪問看護師の関わりと、実際に自宅で看取りを経験されたご家族の感想をご紹介します。



## 訪問看護師の関わり

### <ご本人へ>

- 最期の時まで、どこで、誰と、どのように過ごしたいかをうかがいます。
- 注) 途中で気持ちが変わっても大丈夫です。
- 体調や生活の様子を観察し、困っている時にはその都度「こうしたい」という想いに寄り添い、自分でできる方法を一緒に考えたり、必要時にはお手伝いをします。24時間いつでも対応します。

### <ご家族へ>

- 現在、からだの中で、どんなことが起きているのか、どのように対応したらよいのか、また次にどうなるかなどを予測して説明し、安心して介護できるように支えます。
- 体調の変化に伴い、介護負担が増えます。ご家族・サービス担当者とは相談して負担軽減となる方法を検討します。

## 自宅での看取りを経験されたご家族の感想

大腸がんの末期で「最期は病院で」と決めて退院したDさんですが、自宅で過ごすうちに「ずっと家にいたい」と言われるようになりました。その気持ちをご家族が受け止め、往診医も見つかり、最期の時をご自宅で迎えることができました。そんなDさんのご家族から「自宅での看取り」を経験した感想をいただきました。



「自宅で最期まで過ごしたい」という母の想いを訪問看護師さんを通じて知り、不安はありましたが可能な限りその想いを叶えてあげようと家族で決めました。病状の変化やできないことが増えてくると、とても心配で、看護師さんたちに相談したり、対処の仕方などを教えてもらったりして何とか過ごすことができました。

「最期は病院へ行くよね」と未知への恐怖を感じていた子供たちも、母が少しずつ弱っていく姿を身近に見て、声をかける回数が増えるなど徐々に受け入れられるようになりました。

至らないこともありましたが、訪問していただけたお医者さんが決まった時の母の笑顔思い出して、少しは希望を叶えてあげられたかなと思っています。

## こんな想いに寄り添いました

自分のアトリエで最期まで絵を描いていた

自分で植えた庭の花木を見ながら過ごしたい

大家族で孫やひ孫に囲まれて、長年介護してきた妻の傍にいたい

一人でも今までどおり自由に過ごしたい

残された時間で、家業をできるだけ息子に伝えたい

大好きな妻や犬・猫をそばに感じながら過ごしたい

家長として仏様のお世話をしたい

いつでも訪問看護にご相談ください

私たちの想いを  
受けとめて  
くれるんだって

